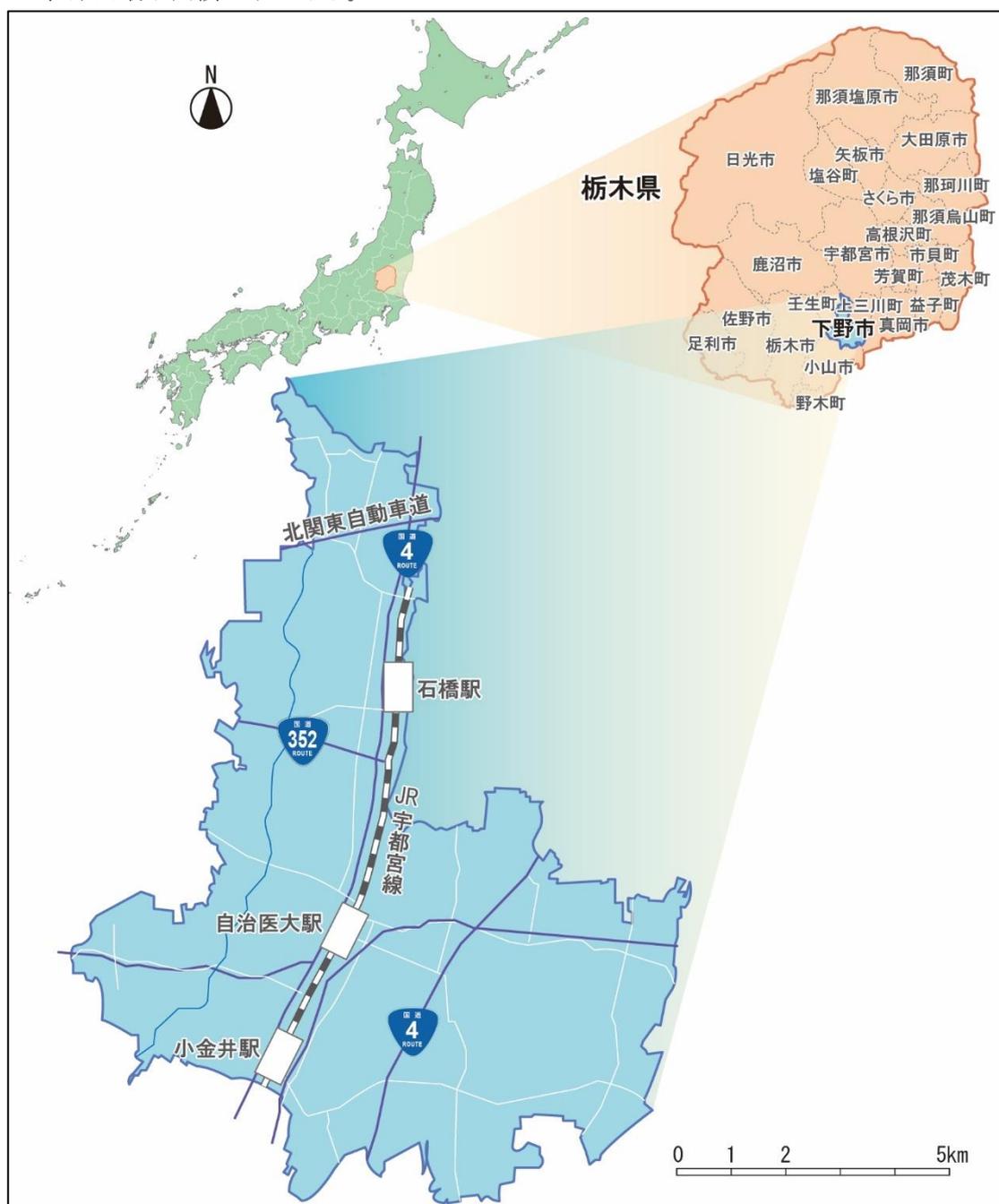


## 第2章 下野市の概要

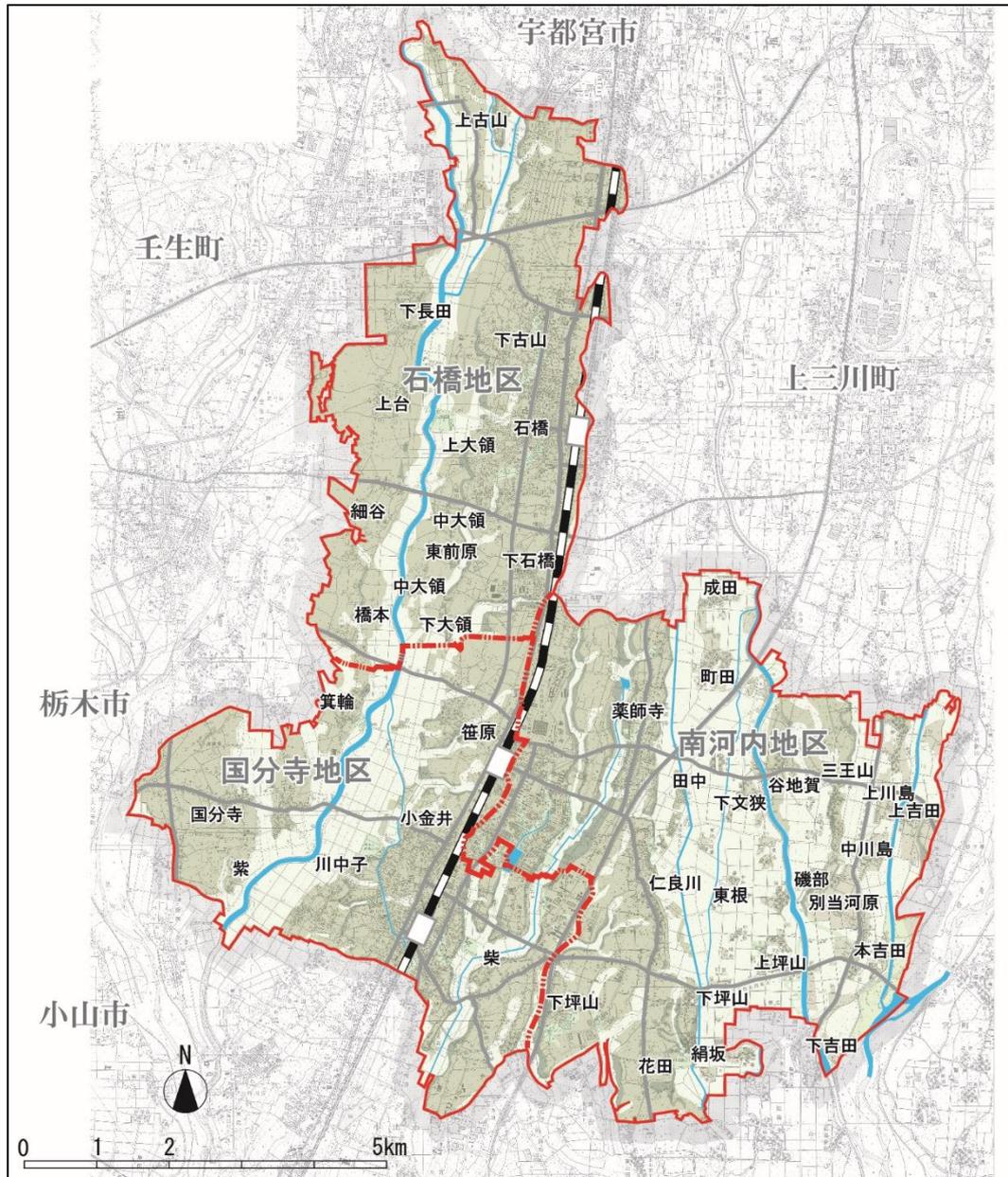
### 1. 自然的・地理的環境

#### (1) 位置・面積

下野市は、関東平野の北部、栃木県の中南部に位置し、都心から80km圏にあり首都圏の一端を構成している。北は県都宇都宮市、南は小山市、東は真岡市(旧二宮町)と上三川町、西は栃木市と壬生町に接し、市域は南北約15.2km、東西約11.5km、面積は74.59 km<sup>2</sup>で、県内最小面積の市である。



下野市の位置



下野市の地名

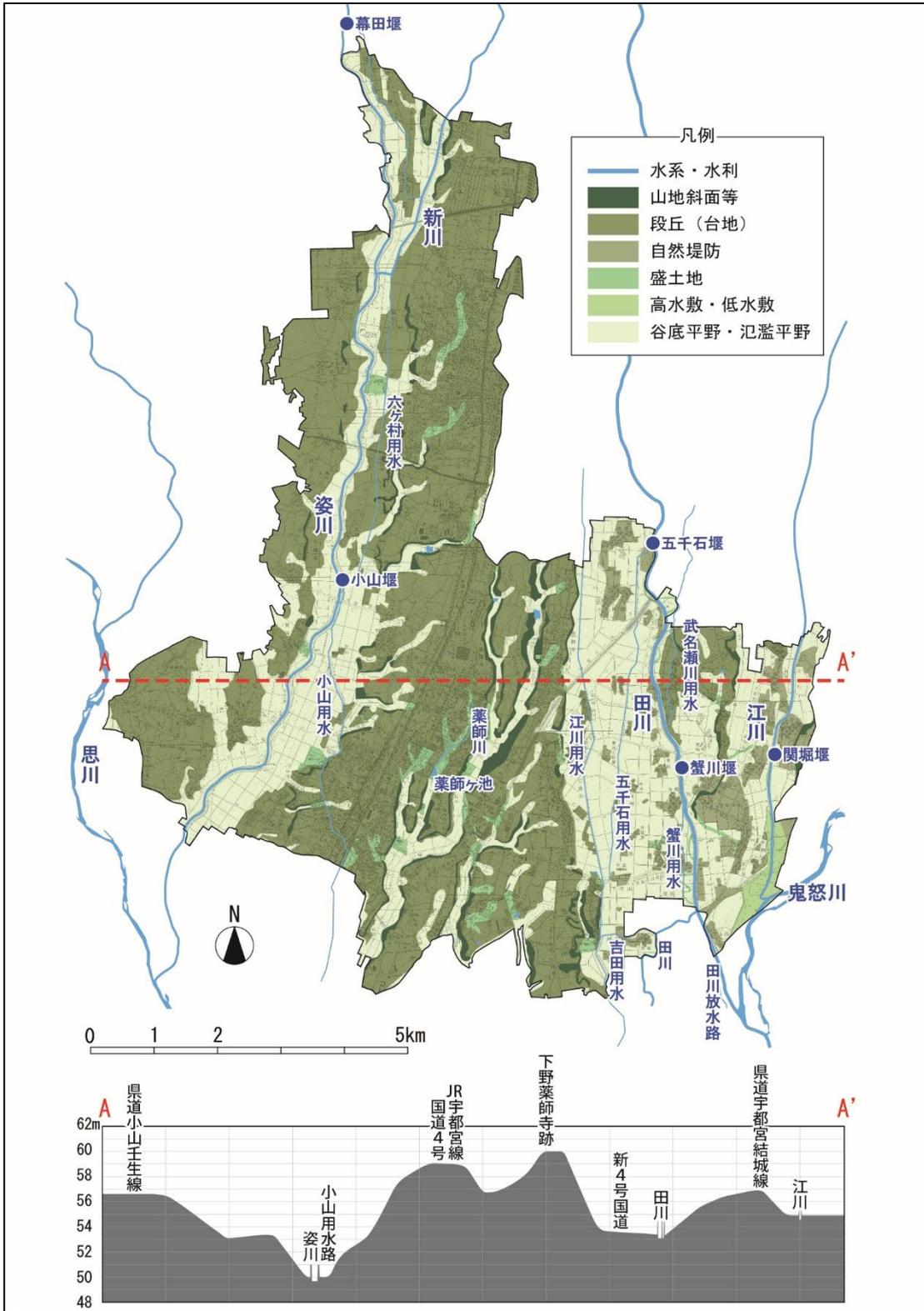
## (2) 地形・地質

栃木県の平野部は、南へ緩やかに傾斜し、南部は関東平野の北縁に連なっている。下野市全域の地形をみても南へ緩やかに傾斜している。

市内の西に新川、姿川、東に田川、江川、江川が合流する鬼怒川が南流しており、その河川に沿って谷底平野や氾濫平野が、その低地の縁に沿って自然堤防や段丘等の台地が形成されている。これらの河川を下ると利根川水系となる。

古代から、サケ・コイ・フナ・ウナギ・ナマズ・ウグイ・オイカワなどの漁撈の場として利用され、姿川には江戸時代の通船の記録もあり、水運としても利用されていた。江戸時代以降、これらの河川には農業用水や堰が設けられた。鬼怒川、田川に五千石用水、

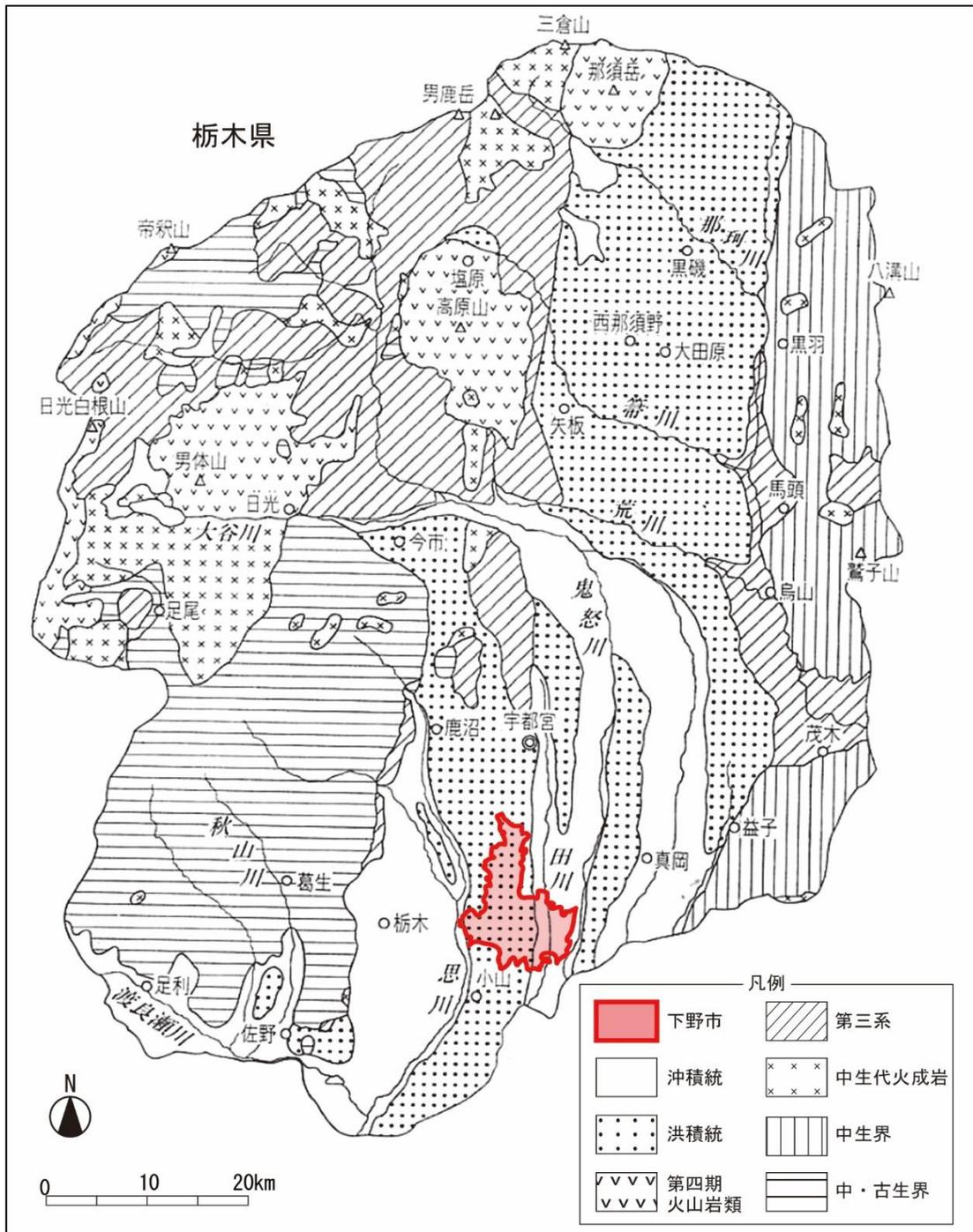
武名瀬川用水など 10 以上の用水と 8 か所の取水堰が設けられた。姿川には、旧石橋町地内に六ヶ村用水など 8 つの用水、旧国分寺町地内には小山用水などが設けられた。その他、薬師ヶ池・薬師川は、大雨時の排水路や調整池の機能を持っている。



下野市の地形

栃木県にみられる主な地層は、古・中生代の<sup>たいせきがん</sup>堆積岩や<sup>かせいがん</sup>火成岩と新生代第三紀の火山活動に伴う凝灰岩類（宇都宮市の大谷石等）、その後の第四紀に河川や海の堆積作用によって形成された<sup>されきそう</sup>砂礫層、それに降下火山灰からなる関東ローム層（赤色の火山灰土）である。関東ローム層による土壌は排水が良く、<sup>かんびよう</sup>干瓢の原料である夕顔の栽培に適している。

下野市には、台地上に第四紀の更新世に形成された洪積層がみられるほか、河川沿いの低地には、河川の働きにより<sup>たいせき</sup>堆積した土砂層である<sup>ちゆうせき</sup>沖積層が広がっている。

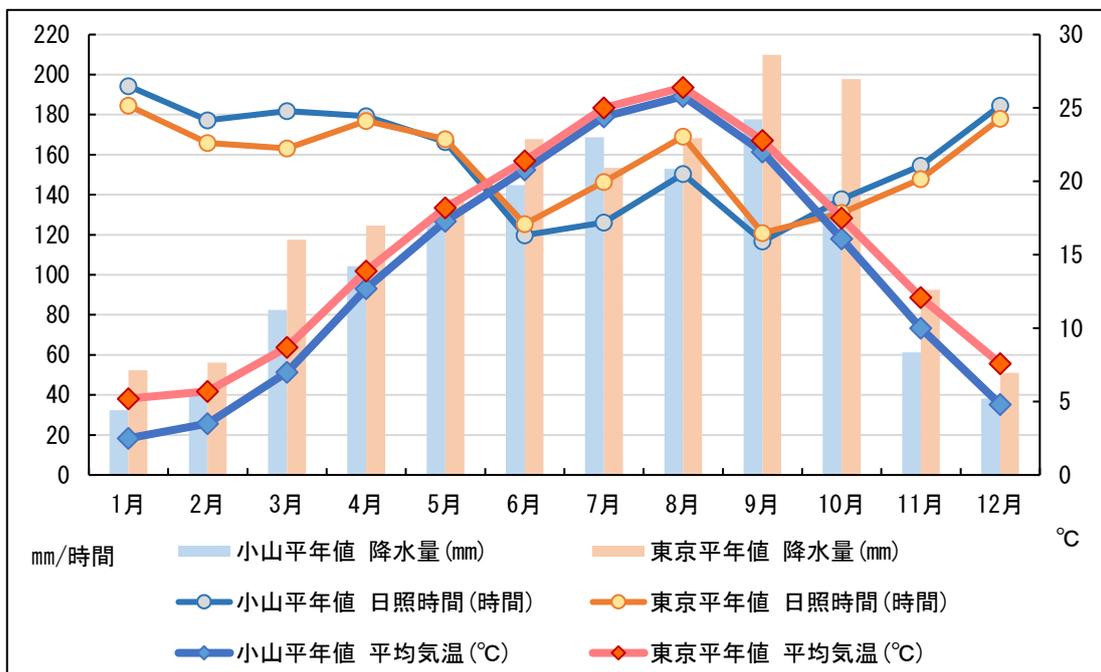


栃木県の地質/下野地理学会編『日曜の地学（9）栃木の地質をめぐって』（築地書館、1979）に下野市の位置を記載

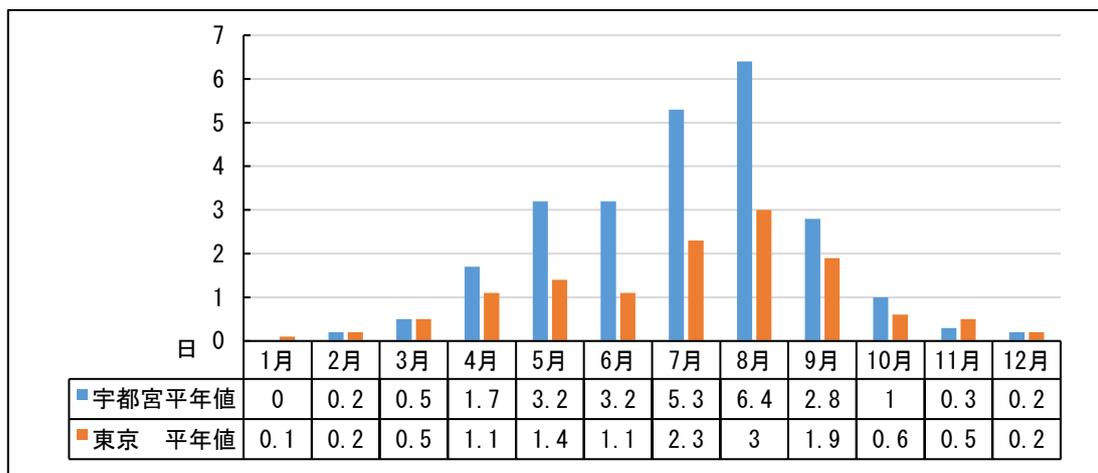
### (3) 気候

本市周辺の年平均気温は約 14℃、年平均降水量は約 1,300mm（隣接する小山市のデータ）であり、夏は高温多湿、冬は低温乾燥のやや内陸性を帯びた温暖な気候で、積雪はほとんどなく、台風等の被害も比較的少ない地域である。

夏季は、気温の上昇により積乱雲が発達して雷が多く発生する。8月から9月にかけて降水量が多く、湿度が高いことが特徴である。この時期の雷雨は、干瓢の原料である夕顔にとっても、地面を冷やし、水分が実を太らせて成長を促す好条件となる。冬季は、海から離れているため日中と夜間の気温差が大きく、北西から季節風が吹くため、平地でも氷点下になる日が多い。また、冬季は日照時間が長いという特徴もある。



小山・東京の月別降水量・日照時間・気温の平均値／気象庁「過去の気象データ」を基に作成※

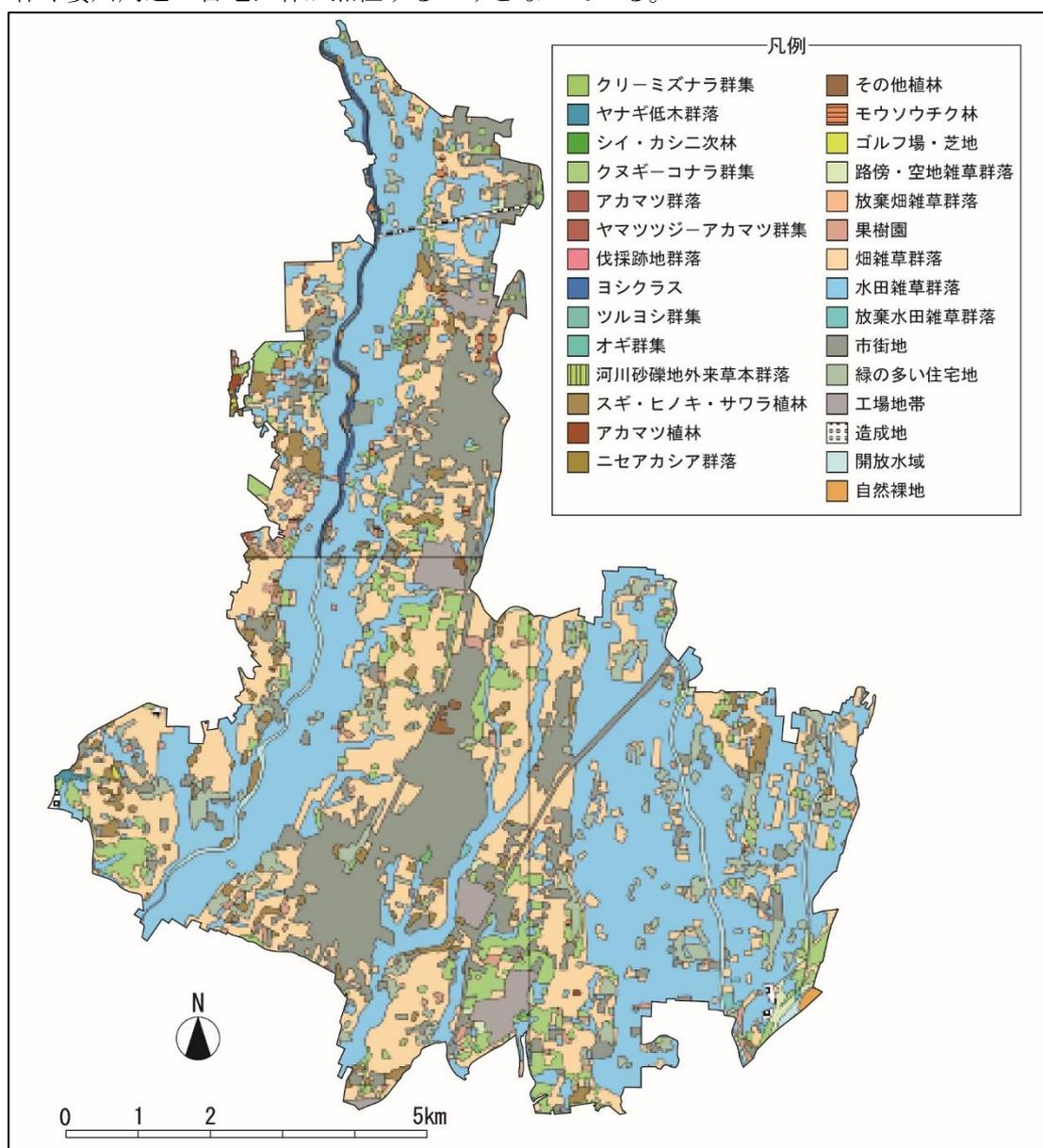


宇都宮・東京の雷日数の平均値／気象庁「過去の気象データ」を基に作成※

※昭和 56 年（1981）～平成 22 年（2010）の 30 年間の観測値の平均をもとに算出

(4) 植生

本市域は暖帯常緑広葉樹林帯に属するが、一部地域には暖帯落葉樹林帯の植物も入り込んでいる。暖帯常緑広葉樹林は関東平野の主要部に広く分布し、アラカシ、シラカシ、シイ等の樹木が中心である。照葉樹林または暖温带林と呼ばれ、略してカシ、シイ帯ともいわれる。市内の東西に流れる河川に沿って低地には水田、河岸段丘上には畑地、台地には雑木林が広がり街道を中心に集落が形成された。雑木林は薪や炭等の燃料や堆肥の供給源として利用されて人々の生活と深いつながりを持っていたが、石油やガス、化学肥料の普及によって次第に雑木林が利用されなくなった。また、人口増加に伴い市街地化が進んだことで雑木林が住宅地や工場敷地、道路へと変わり、現在は神社や寺院の境内林や姿川周辺の台地に林が点在するのみとなっている。



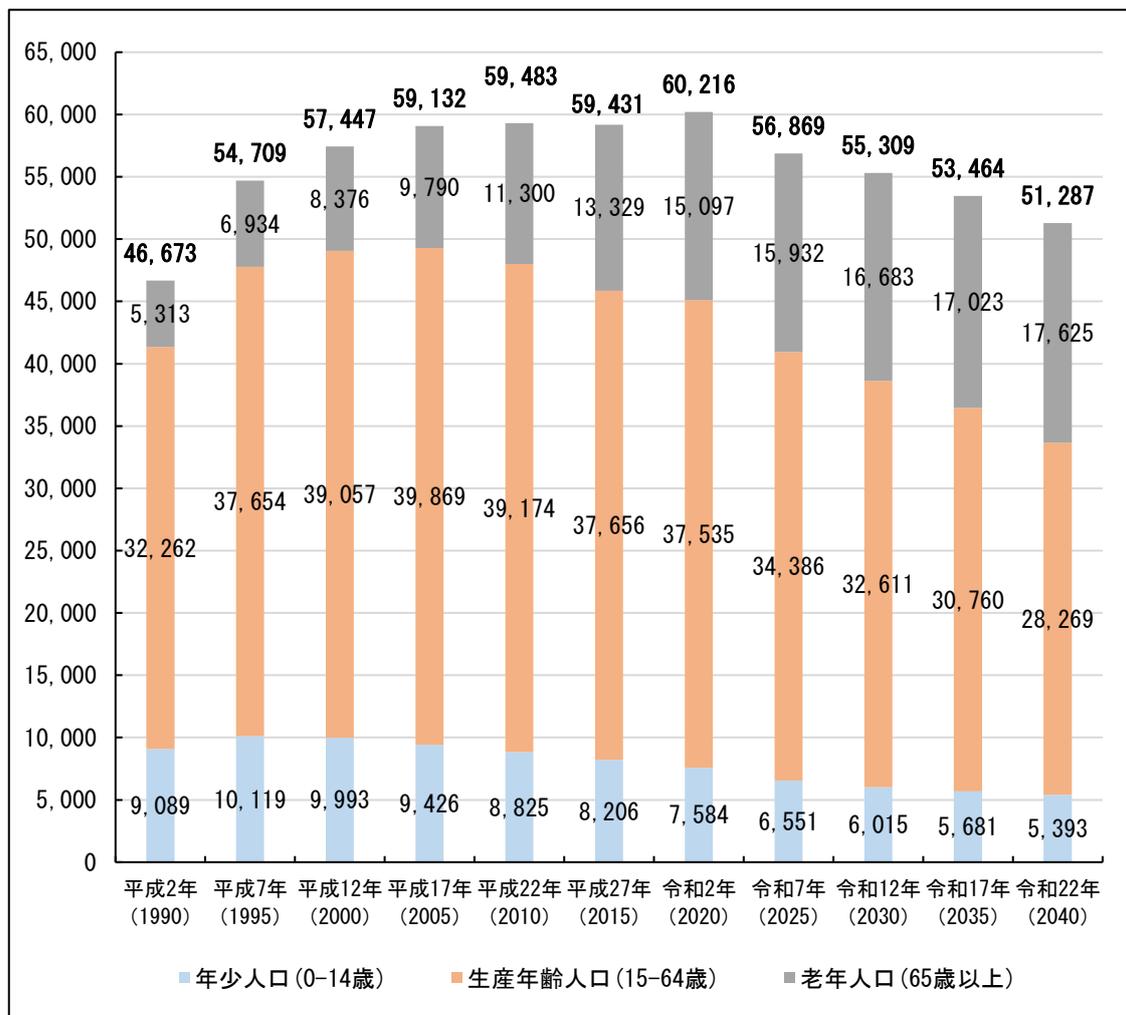
下野市の植生/1/2万5千植生図 GIS データ(環境省生物多様性センター) を基に作成・加工  
<http://gis.biodic.go.jp/webgis/>

## 2. 社会的状況

### (1) 人口動態

下野市の総人口は、令和2年(2020)4月末時点で60,216人である。平成2年(1990)以降は人口が急増し、平成22年(2010)まではゆるやかな増加傾向にあったが、平成22年(2010)に人口減少に転じ、その後は減少が進行すると推測されたものの平成27年(2015)から令和2年(2020)にかけて微増している。国立社会保障・人口問題研究所の推計値によると、令和22年(2040)時点で51,287人と推計されており、今後は、人口減少が進行していくことが予想されている。

年齢3区分別人口をみると、平成27年(2015)時点で、年少人口(0-14歳)が8,206人(13.9%)、生産年齢人口(15-64歳)が37,656人(63.6%)、老年人口(65歳以上)が13,329人(22.5%)となっている。今後は、老年人口の増加、生産年齢人口の減少が予想されており、少子高齢化が進むと考えられている。



下野市の人口数の推移/平成2～27年：国勢調査、令和2年：下野市年齢別人口統計（令和2年4月末のデータ）、令和7～22年：『下野市人口ビジョン』の将来推計より作成

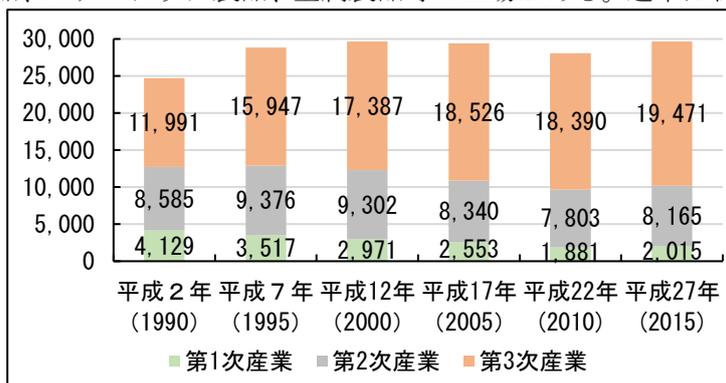
(2) 産業

本市の主要産業は、全国値を分母とした産業特化係数からみると、農業、製造業、医療・福祉、65歳以上の農業、複合サービス事業等である。

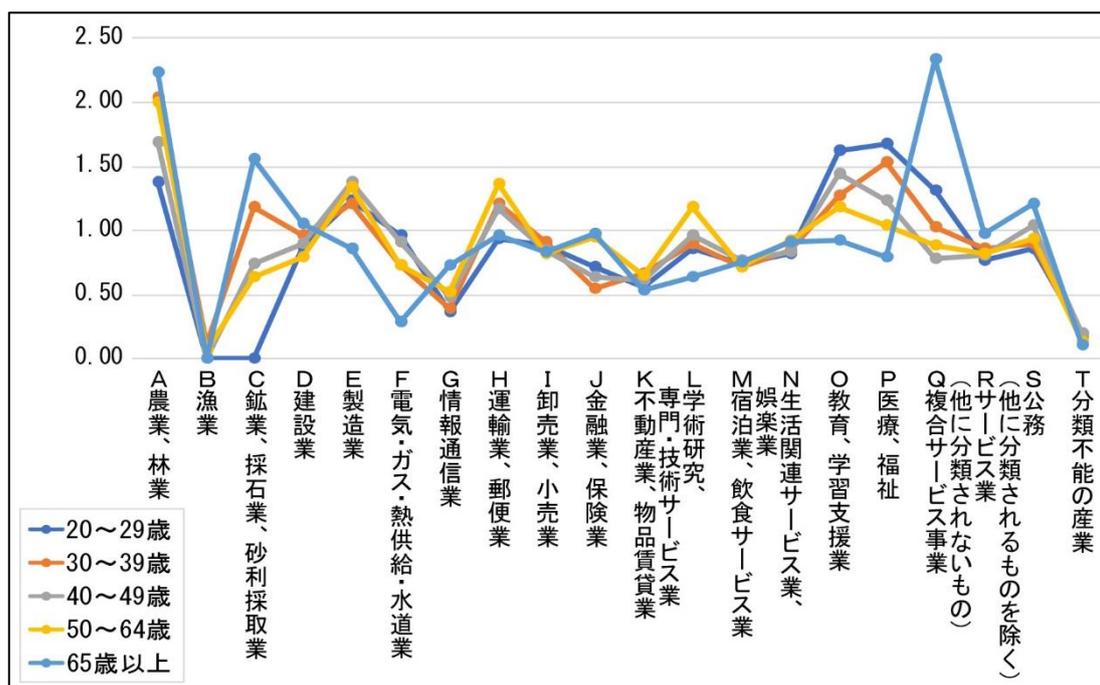
農業では、立地条件を生かした都市近郊農業により、露地野菜、施設園芸を営むとともに、畜産業との複合経営も実施している。とくに合併以来、干瓢は生産量日本一を誇る。

製造業では、首都に近く幹線道路、鉄道等の交通条件に恵まれていることを活かし、輸送用機械器具製造業、食料品、プラスチック製品、金属製品等の工場がある。近年は物流拠点としての発展にも期待されている。

商業における小売店舗数・小売従業者数は、減少傾向にある。小売店舗数の減少が市街地・商店街での空き店舗の増加を招き、活気が失われる原因となっている。



下野市の産業別就業人口の推移



全国値を分母とした産業特化係数/『下野市人口ビジョン』より

(3) 土地利用

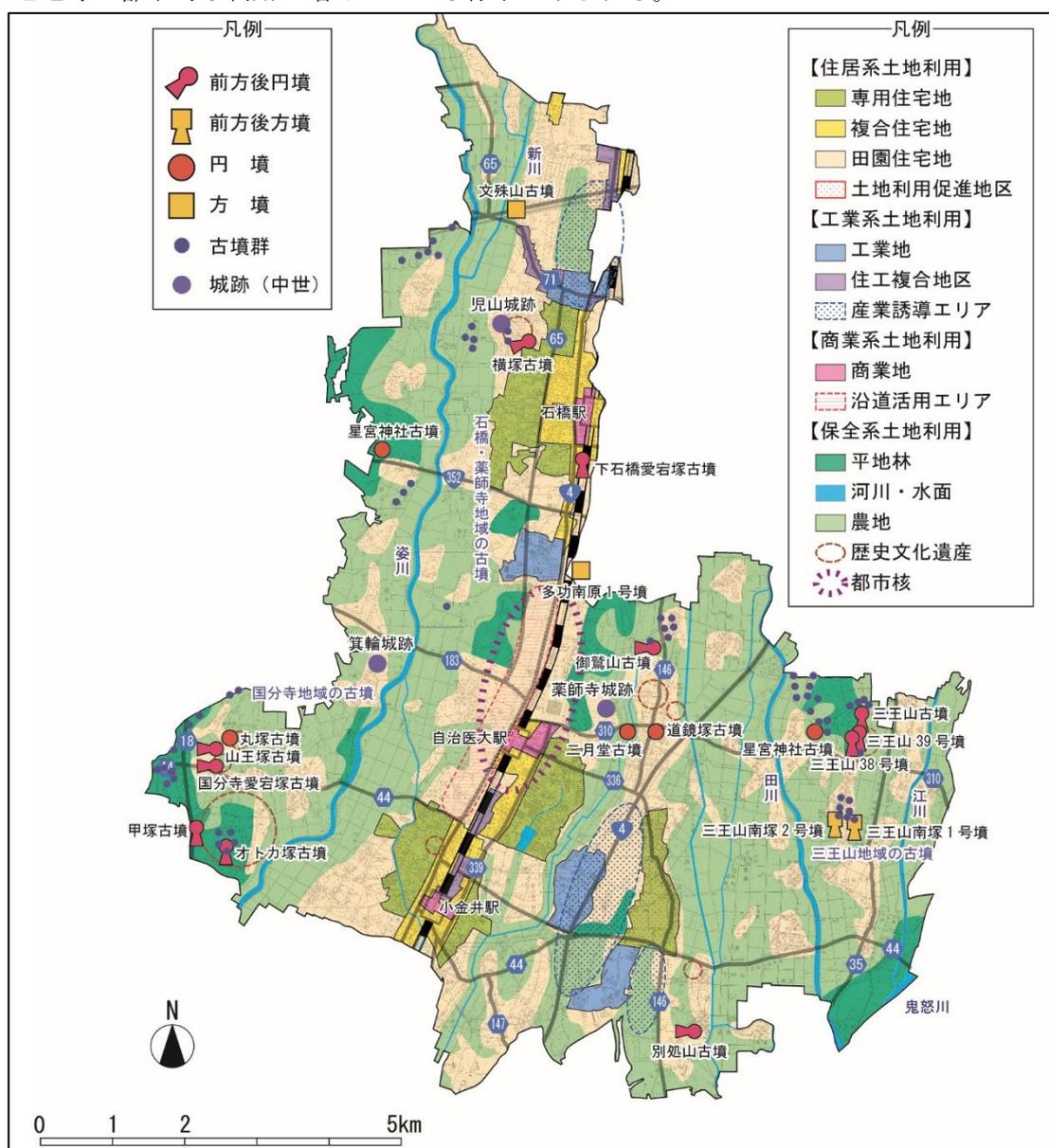
本市の東部には鬼怒川と田川、西部には思川と姿川が南流しており、その周辺には田園環境が広がっている。河川に接する低地は水田として利用され、低地と対になる台地には野菜等の商品作物のほか、生産開始から300年の歴史を持つ干瓢の原料となる夕顔畑が広がっている。夕顔の作付けにおいて、堆肥の原料となる落ち葉の供給元である平

平地林が不可欠であり、現在も畑地の周辺には、クヌギ・クリ等の落葉広葉樹を主とする平地林が広がっている。平地林は、古墳や中世城跡を起源にしていることが多い。

第二次国土利用計画下野市計画における平成 26 年（2014）時点の土地利用の状況は、農地が 61.0%、森林が 4.6%、水面・河川・水路が 5.4%、道路が 8.6%、宅地が 20.4% となっている。

市全域の 74.59 km<sup>2</sup> が都市計画区域で、市街化区域が 9.82 km<sup>2</sup>、市街化調整区域が 64.77 km<sup>2</sup> である。土地利用の半分以上が農地で占められており、宅地は石橋駅・自治医大駅・小金井駅周辺の市街地と、古来より宅地として利用されている河川に近い台地の端部に集中している。

土地利用を平成 18 年（2006）の合併時と現状と比較すると、農地や森林等が微減し、宅地等の都市的な利用が増加している様子がみられる。



下野市の土地利用/「下野市都市計画マスタープラン」土地利用の基本方針図に古墳等の位置を記載

(4) 交通

本市には、国道4号、新4号国道、J R宇都宮線等の首都圏を結ぶ大動脈が南北に通っている。自治医大駅から東北自動車道栃木インターチェンジまで約30分で移動することが可能である。近年は、北関東自動車道が開通し、2つのインターチェンジ（壬生、宇都宮上三川）が供用開始されたことにより、交通の利便性が増している。

また、本市はJ R宇都宮線に小金井駅・自治医大駅・石橋駅の3駅を有し、都心まで快速で約70分の通勤圏にあり、小山から新幹線利用で約40分の距離にある。小金井駅は、始発、終着駅として首都圏への通勤・通学の利便性に特に優れている。近年は、J R宇都宮線と横須賀線を直通運転する湘南新宿ラインや、東海道線と直通運転する上野東京ラインが開通したことにより、交通の利便性はますます高くなっている。



下野市の交通

### 3. 歴史的背景

#### (1) 旧石器時代から古墳時代

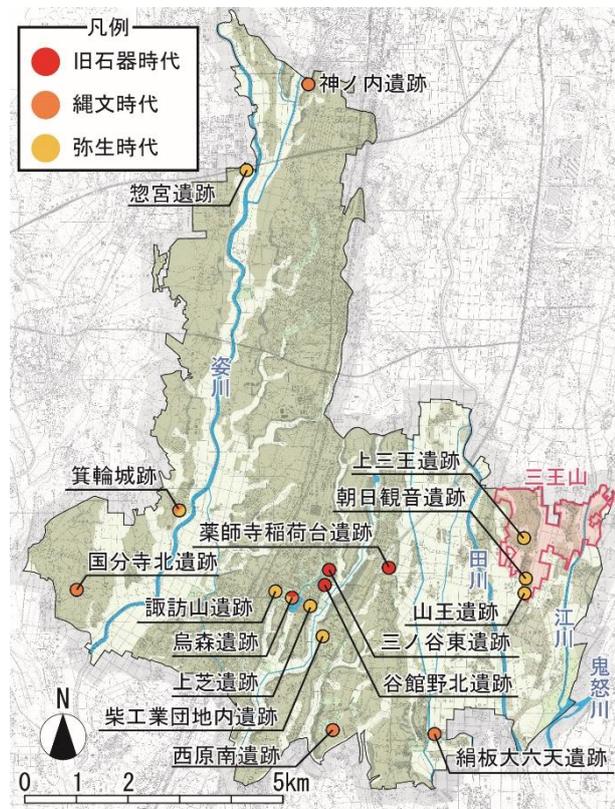
後期旧石器時代の石器を製作した遺構が JR 宇都宮線自治医大駅の東側台地上や姿川の西岸の後期古墳や下野国分寺・国分尼寺（ともに国指定史跡）が造られた台地上で確認されており、県北の高原山や信州などから運ばれた黒曜石でつくられたナイフ形石器等が出土している。これらのことから、本市でも後期旧石器時代には他地域の人々との交流があったことが分かる。

その後、縄文時代草創期（約 1 万 1 千年前）には、薬師寺稻荷台遺跡から爪形文土器が発見されている。この土器が出土した直径 2 m 程度の円柱形の穴の中からは、爪形文土器と共に栃木市西部で産出するチャート製の石鏃（矢じり）1 点や、石材や石器を加工した際にできる頁岩など他地域から持ち込まれた石材による剥片等が出土している。ただし、縄文時代草創期から前期にかけては、ごく限られた遺跡から土器等が見つかる程度であり、永く定住した人々は少なかったと考えられている。

縄文時代中期以降になると、徐々に集落が確認されるようになり、神ノ内遺跡や国分寺北遺跡、絹板大六天遺跡、西原南遺跡等から竪穴建物跡をはじめとした遺構が発見されており、市内の広範囲に人々が定住を始めたことが分かっている。これらの遺跡からも市内では採集できない多孔質安山岩製の石皿やすり石が多数出土しており、時代を超えて連続と人とモノの交流がおこなわれていたことがわかる。

栃木県内では、これまで確認されている弥生時代の遺跡の数は少なく、古墳時代の集落に比べ規模も小さい。確認されている遺跡の多くは、宇都宮市南部から本市にかけての台地上に多く分布し、三王山地区では 20 軒を超える後期の竪穴建物跡が確認されている。昭和 40 年代に調査が行われた柴工業団地内遺跡からは、弥生時代後期の再埋葬が確認されている。みのおじょうあとから見つかった竪穴建物跡からは、現在の群馬県や茨城県、埼玉県や南関東地域などから運び込まれたと考えられる土器が出土している。このことから弥生時代においても広範囲でより詳細な人とモノの交流があったと考えられている。

三王山地区の朝日観音遺跡からは北関東でも例の少ない鉄剣（全長 30cm）が出土しており、鉄製の武器を権力の象徴とする考え方が統治にも及んでいたことがわかる。



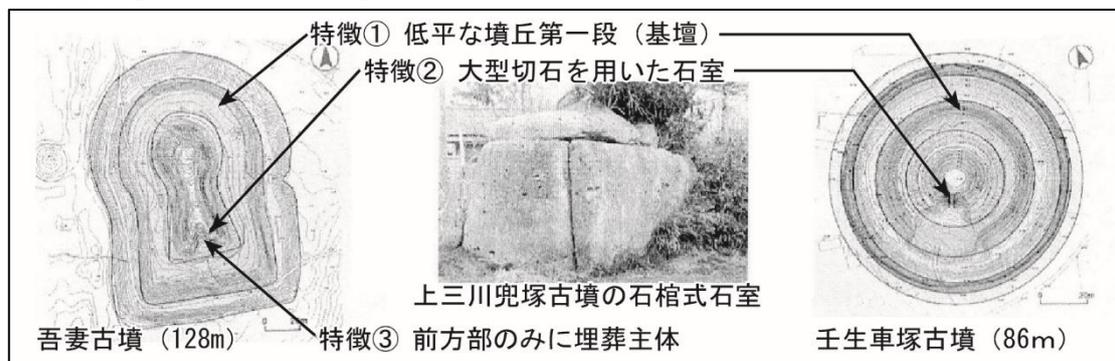
旧石器～弥生時代の主な遺跡の分布図

三王山地区は、4世紀前半頃、弥生時代後期まで集落として使われた台地上に古墳時代前期の古墳群が出現した。中でも前方後方墳である三王山南塚2号墳からは、東海地方の影響を受けた土器類が出土しており、その遺物の年代から関東地方でも最古級の古墳と考えられている。その後、三王山地区の北約7.5kmには茂原愛宕塚古墳からはじまる茂原古墳群が形成された。河川流域ごとに出現した小勢力は徐々に統合され、5世紀中頃には、笹塚古墳（墳丘長101m）や塚山古墳（同98m）など大型の前方後円墳を主とした古墳群が宇都宮南部地域に形成される。

その後、5世紀末から6世紀初頭には、宇都宮南部から変わって姿川と思川に挟まれた地域に首長墓が造られるようになる。この後、両河川の合流点付近には、摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳（国指定史跡・小山市）、吾妻古墳（国指定史跡・栃木市・壬生町）など墳丘長が120mを超える前方後円墳が継続的に造られ、6世紀中葉以降、本市域を中心に思川、姿川、田川流域に前方後円墳（首長墓）が造られるようになる。南河内地区南部（小山市梁古墳群へと続く台地縁辺の古墳群）に所在する別処山古墳からは、墳丘の規模と比較して豪華な副葬品である把頭に青銅の鈴を収めた銀装大刀、三鈴鏡等が出土している（別処山古墳出土遺物、県指定考古資料）。

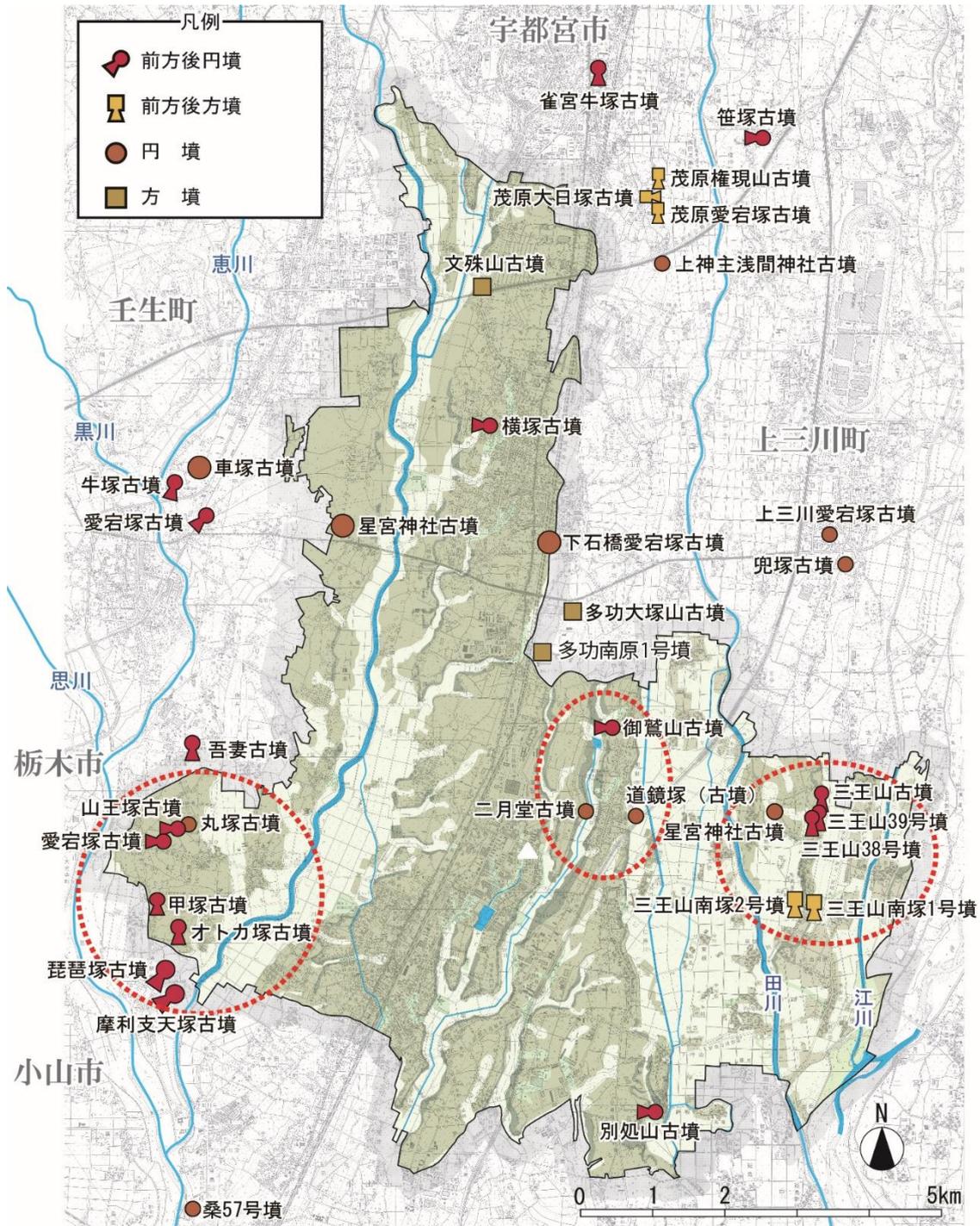
東部の田川流域では墳丘長が80m級の前方後円墳である三王山39号墳、後に下野薬師寺が建立される薬師寺地区にも同規模の御鷲山古墳が築造された。また、西部の姿川流域の石橋地区には、同規模で墳丘に多数の埴輪群をもつ横塚古墳や金銅製の馬具類とともに墳丘上に埴輪に替わって並べられたと考えられる須恵器甕類の破片が多数出土した同規模の帆立貝形古墳である下石橋愛宕塚古墳が築造された。さらに、後に下野国分寺が建立される国分寺地区には愛宕塚古墳（78m）、山王塚古墳（90m）、出土した埴輪等の遺物が国の重要文化財に指定された甲塚古墳（80m）等が築造された。

これらの古墳は、墳丘の1段目に幅広の平坦面を有し、前方部に凝灰岩の大型切石を使用した横穴式石室を設けるという共通の特徴がみられる。こうした特徴を持つ古墳は、現在、「下野型古墳」と分類・定義されており、下野型古墳は、下野市域を含む南北14km、東西13km一帯という範囲でほぼ同時に築造されていることから各地の首長層が無下に争うことなく共通の意識のもとで連合を組み、「輪番制による地域権力の保持」のような仕組みの表象として、同規模・同形の墳丘を築造したと捉え、これらの総称として「しもつけ古墳群」と呼称している。



「下野型古墳」3つの特徴

7世紀になると列島規模で前方後円墳の築造が停止し、畿内や西日本では大型の墳丘をもつ古墳の築造が終息を迎えるが、東国では大型の円墳や方墳が築造されている。本市区でも7世紀を境にそれまで80m規模に統一されて築造されていた前方後円墳に変わって円墳の築造が行われ、国分寺地区には丸塚古墳（直径58m）、近隣の壬生地域にはこの時期国内最大級の車塚古墳（直径84m）が築造された。この現象は中央と地方の政治動向の捉え方の「差」を示していることと推察される。



下野市周辺の主な古墳の分布図

## (2) 飛鳥・奈良・平安時代

645年に起こった政変(乙巳の変)などにより、中央集権国家としての新たな政治体制・機構の構築に伴い、国造制に代わる評制の施行や戸籍の整備など、中央集権化に伴う改革が徐々に進められた。政治システムの変容と連動して、そのシンボルとしてつくられてきた古墳の築造は終焉を迎え、中央政権に携わる氏族だけでなく地方の有力氏族も寺院の造営に着手した。本市域においてもこの変革の痕跡を確認することができる。7世紀中葉頃に薬師寺地区の北方2kmに県内最大の方墳多功大塚山古墳(1辺53m)や多功南原1号墳(1辺27m)が築造されるが、この古墳の築造終了後、あまり時間を取らずに氏寺としての下野薬師寺が建立されたと想定されることから改めてシンボルとして古墳がもつ意義の変容をうかがうことができ、中央と結びついた各地の有力氏族は一族の勢力を誇示するべく氏寺の造営に着手した。

河内評を本貫とする豪族下毛野氏は、後に大宝律令の制定に関わる下毛野朝臣古麻呂を輩出した有力氏族であり、一族の居宅もしくは行政施設と想定される落内遺跡の隣接地に氏寺として下野薬師寺(国指定史跡)が建立されたと想定されている。

飛鳥時代は、従来の地方で用いられた制度から中央集権制への転換を図るため様々な改革が実施された。行政区分として全国に五畿七道が整備され、国ごとに国府が置かれ国府間を結ぶ官道として、当地では東山道が敷設された。下野国では下野国庁(国指定史跡・栃木市)が上野国と陸奥国間の国府として8世紀前半頃に設置された。さらに国の機関を支える役所として、郡(評)ごとに官衙(評家。後の郡家)を設置した。それらの行政機能を統括する役職としての評督(後の郡司)に各地の有力豪族を地方官僚として取り込んでいった。

本市の落内遺跡がこの周辺地域では初期の公的施設の可能性が高いが、それに続いて初期の官衙機能を有する施設の可能性が指摘された西下谷田遺跡(宇都宮市)、河内評(郡)家の上神主・茂原官衙遺跡(宇都宮市・上三川町の国指定史跡)、河内郡家の多功遺跡(上三川町)などが設置され、このことから本市周辺が古代の行政機構が集まる重要な地域であったことがわかる。

また、宇都宮南部から壬生町、本市域の落内遺跡など、7世紀後半の遺跡からは多数の新羅系土器が出土している。当時のことを記録した養老4年(720)の『日本書紀』や延暦16(797)年の『続日本紀』にも数回にわたって東国各地や下野国内に渡来系の人々が配置されたことが記されており、これらの出土資料は文献の記載を裏付けている。渡来系の人々は、未開の地を多く保有する地方の開発を目的として移住させられた集団とみられ、彼らは、製鉄などの金属加工、牛馬の飼育や窯業などの技術に長けていた。創建段階の下野薬師寺の瓦生産をはじめとする造営にも彼らの関与があったものと考えられる。

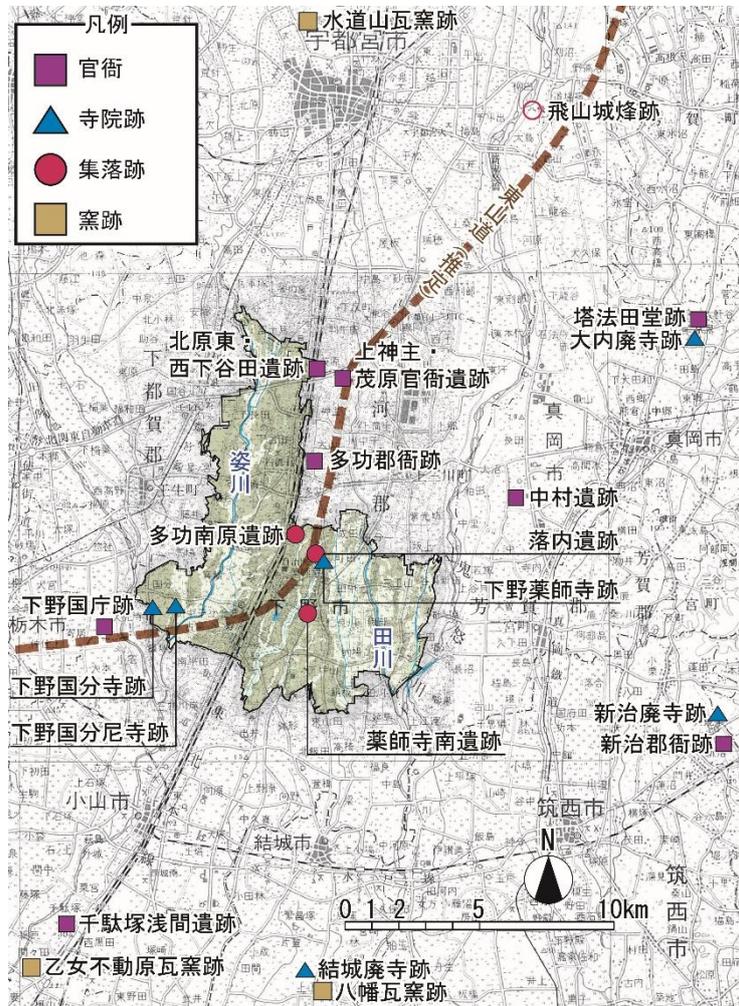
下毛野氏の氏寺として建立された下野薬師寺は、天平年間には国の機関である「下野薬師寺造寺司」によって官営の寺として改修が進められた。東国では類のない大規模であることから平城京造営に関する技術者の於伊美吉子首を「造寺工」として、また、大和興福寺の瓦工人も下野薬師寺建立のために招聘された。

天平 13 (741) 年には聖武天皇の国分寺建立の詔を受け、8 世紀中頃には現在の国分寺地区に下野国分寺・国分尼寺（ともに国指定史跡）の造営が進められた。

天平勝宝 5 (753) 年に唐から鑑真を招聘したことで、僧の資格を得るための正式な受戒が可能となり、翌年には東大寺大仏殿前で聖武上皇以下 400 人の僧侶が受戒した。

その後、天平宝字 5 (761) 年には筑紫（現在の福岡県）観世音寺と下野薬師寺にも戒壇が置かれ、後に「本朝三戒壇」と呼ばれた。東大寺には西国から、筑紫観世音寺には九州から、下野薬師寺には東国の僧侶を目指す優秀な人材が集まり、戒律を受けたと考えられている。

また、下野薬師寺は受戒の寺としての役割を果たす一方で、薬師寺僧行信や法王道鏡などの高僧の配流先の役割を担い、遠国の重要な施設としての格式を誇った。『続日本後紀』嘉祥元年 (848) 11 月己未条によると、おごそかで威厳があり、奈良にある七大寺のようだと書かれており、壮大な寺院が本市域に存在していたことを示している。

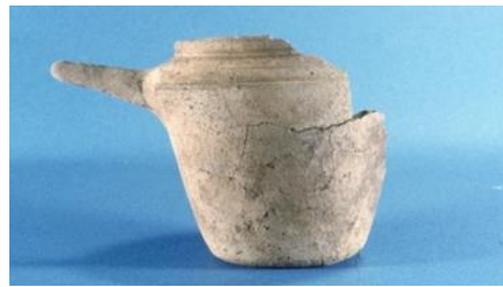


飛鳥・奈良・平安時代の寺院・官衙跡の分布図

東国の中心寺院として隆盛を極めた下野薬師寺もその後は衰退し、寛治 6 (1092) 年には、下野薬師寺僧慶順が東大寺別当に対して復興を要請するほど荒廃し、その姿は「猪鹿の園」と表記され、官立の施設としての役割は終焉を迎えた。



下野薬師寺（CGによる復元）



新羅系角付土器（落内遺跡出土）

### (3) 鎌倉時代から戦国時代

鎌倉時代から戦国時代、下野市は北の宇都宮氏と南の小山氏の勢力範囲の境界であったことから、各地に多くの城館が築かれた。また、中世に整備された街道で「うしみち」と呼ばれる鎌倉から下野を経由して陸奥を結んでいた奥大道が整備された。

南河内地区では、小山氏一族の支族である薬師寺氏が薬師寺城を築くが、薬師寺氏の動静は15世紀後半以降不明である。石橋地区では、宇都宮氏の南方の拠点となる多功城（上三川町）の支城として、宇都宮氏一族の児山氏が児山城（県指定史跡）を築城し、その周囲には複数の小規模の館を配置して防衛ラインを構築した。現在でも土塁と堀の跡が一部残存している箇所や、既に遺構は消失しているが郭内等の館跡の関連性を示唆する地名が残されている。最終的に児山城は、宇都宮氏が改易となる慶長年間（1596～1615）まで存続したとされている。国分寺地区では、鎌倉初期の小山朝政讓状に「国分寺敷地」と表記されており、現在の下野国分寺・国分尼寺跡一帯が、当時は小山氏一族の支配下に置かれていたことが分かる。

箕輪城は、中世後期以降に築城されたと考えられており、東側に姿川を配置した城の構えであることから東方の敵に備えた城の構造であり、宇都宮方か結城・久下田・下館方からの攻撃に対峙する城であった可能性が高い。

城館以外の中世の遺跡としては、下古館遺跡があり、東西約480m・南北約160m・幅約4mの薬研堀に囲まれ、中央を「うしみち」と呼ばれる道路や、宗教施設、祭祀施設、建物等が堀によって区画された遺構が確認された。これらは宿・市または門前市の跡と考えられ、中世の都市構造を示す貴重な遺跡として評価されている。

このほか、南河内地区には、鎌倉初期の供養塔である東根供養塔（県指定考古資料）が残されている。この凝灰岩製の石造物は、東根地域を支配した佐伯氏が、亡き父母の供養のために建てたもので、塔を製作した人物名も刻まれており、渡来系氏族が関わっていたことが分かる。また、国分寺地区の小金井で約16,000枚、国分寺で約12,000枚、上芝遺跡で162枚の渡来銭が見つかっており、埋納銭か備蓄銭かは判然としないが、大量の銭を収集できるだけの氏族がいたと考えられている。

また、平安時代末期に荒廃した下野薬師寺は、その後鎌倉幕府の庇護により、その命脈を保ち続け、建長年間（1260年頃）には受戒と真言密教の伝授による布教活動を展開した慈猛によって中興を果たした。

その後、南北朝時代、足利尊氏・直義が討幕に伴う戦の戦死者を弔うために、全国に安国寺・利生塔を設けることとなった際に、下野国では下野薬師寺が選ばれ、暦応2年（1339）に安国寺と改称された。しかし、改称後も一般には薬師寺と呼ばれていた。

本市周辺は、北の宇都宮氏と南の小山氏の勢力の交わる地域であったことから、度々戦が行われた。康暦2年（1380）には裳原（現在の宇都宮市茂原）で宇都宮基綱と小山義政が戦っている。天文7年（1538）には宇都宮氏の内紛に伴い、宇都宮氏の重臣である芳賀高経が児山城に籠城したほか、永禄元年（1558）には、上杉謙信が下野に侵攻し、多功城を攻め、児山城主である児山兼朝も出陣し上杉勢を退けるが、児山兼朝は討死した

との記録が残されている。戦国末期には北条氏の下野侵攻に伴い元龜2年（1571）、北条氏と結城氏が薬師寺地域周辺で戦い、北条方の軍勢により安国寺が焼失したとの記録がある。その後も天正6年（1578）に反北条方（佐竹氏等）が北条方となった壬生氏を攻めるために薬師寺地域に進軍したほか、天正11年（1583）には北条方の壬生義雄と反北条である宇都宮国綱と結城晴朝が戦い、北条方を撃退するが薬師寺地域一帯は焼失したと伝えられている。



鎌倉時代から戦国時代の主な文化財の分布図 ※図中の番号は指定等文化財リストと対応する

#### (4) 江戸時代

江戸時代に徳川幕府の政策として五街道（東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道）が整備された。日光街道は、徳川将軍が初代徳川家康の命日に日光東照宮で行われる大祭に参加する日光社参のために整備され、江戸から下野国を経て奥州方面に至る物流の幹線道路としての機能も有していた。これらの街道は将軍や大名をはじめ多くの人々の往来があり、特に将軍の社参の際には10万人を超える大行列となった。

日光街道と、その脇往還である関宿通多功道（日光東往還）、日光道中壬生通り（日光西街道）が現在の市域内を通過していた。下野市内には、小金井宿と石橋宿が設置され、人・物の盛んな往来を背景に発展した。天保14年（1843）の『日光道中宿村大概帳』によると、石橋宿は旅籠30、家数79、人口414人、小金井宿は旅籠43、家数165、人口767人であった。小金井の慈眼寺・石橋宿の開雲寺は、日光社参の際の将軍の休憩所とされ、それぞれ御殿所が設けられていた。将軍の社参に伴い、街道を行き交う人々や近隣集落から手伝いに集まった人々でにぎわう活気のある宿場であったことが記録されている。なお、慈眼寺には、宿場の男衆が句会を開催していた句額が、また小金井宿内には俳諧碑が残っており、文化レベルが高かったことも分かる。

また、日光街道の整備に伴い、江戸日本橋から22里（約88km）の地点に小金井一里塚が設置された。小金井一里塚は明治以後に日光街道が国道4号となった後も存続し、全国的にも2基一対の塚が現存する一里塚は貴重であることから、大正11年（1922）に国指定の史跡となった。なお、23里目の下石橋一里塚も西塚のみであるが現存している。

南河内地区には宿場は存在しなかったが、関宿通多功道が通り、文化2年（1805）刊の『木曾路名所図会』や文化3年（1806）の『五街道分間延絵図及び見取絵図－関宿通多功道絵図』には、当時の安国寺（旧下野薬師寺）周辺の様子が描かれている。これらの絵図には、現在の六角堂と考えられる六角形の建物が認められ、安国寺周辺が小規模ながら門前町のような佇まいであったことが分かる。寛政年間（1789～1801）以降には秋田藩の陣屋が置かれた仁良川に集落が形成され、近世を通じて奥州南部や北関東を江戸と結ぶ流通の大動脈として多くの人や物資が行き交った。鬼怒川におかれた吉田河岸に隣接し、上三川から結城へと南北に連なる上三川通りと、芳賀郡谷田貝町（現真岡市）及び常州下館（現筑西市）から小金井宿へと東西に連なる横往還筋と呼称される街道が交差する地点に所在した吉田村も、河川交通と陸上交通の結節点となり、八幡宮を起点とし上三川通り沿いに建物が立ち並ぶ街並みが形成された。

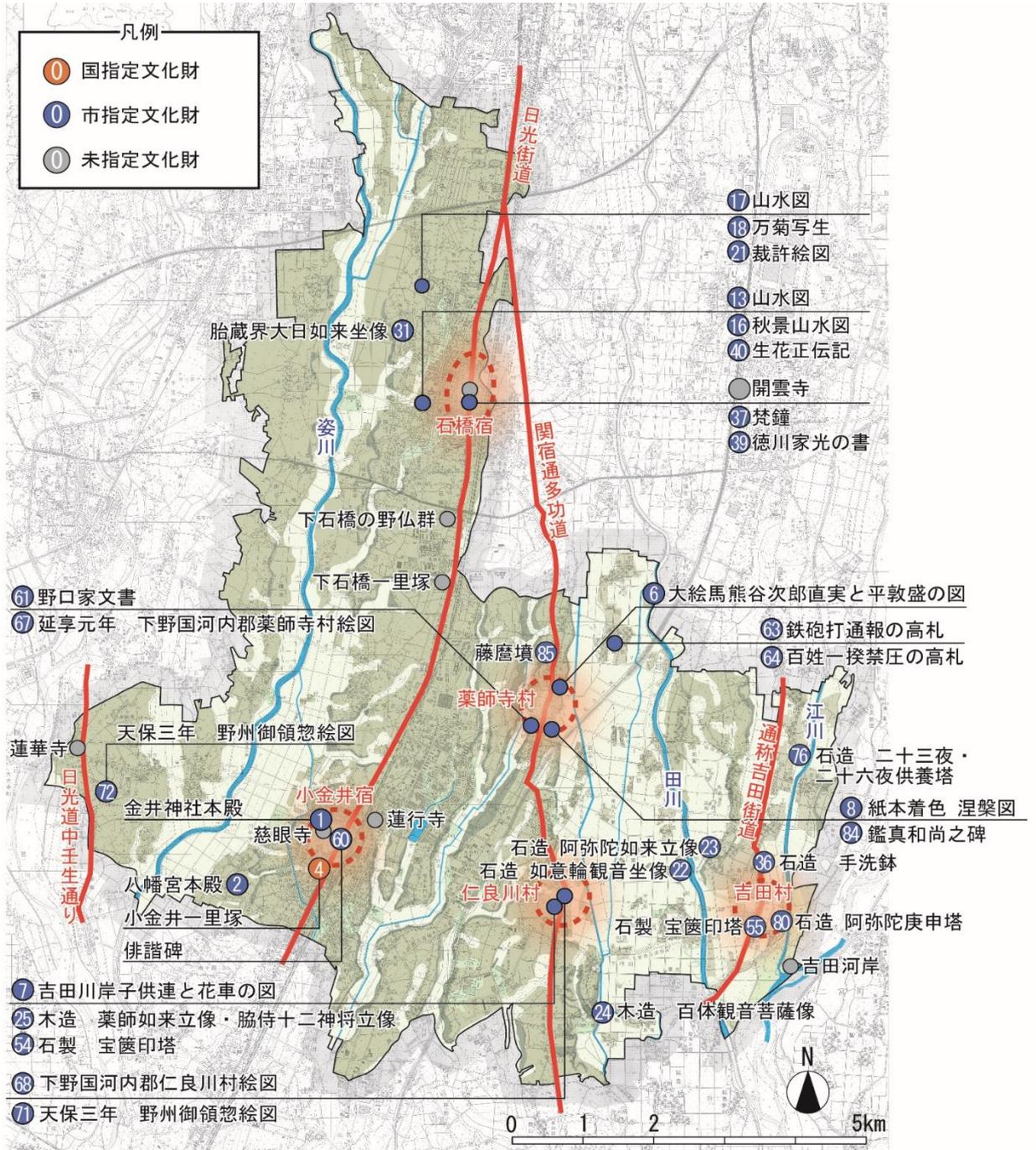
このように、人・物が往来する街道の後背地として広がる農村では、江戸時代中期より農家の副業として結城紬が盛んに生産されるようになり、江戸時代後期には干瓢、養蚕等の商品作物の生産が盛んになっていった。



慈眼寺



開雲寺



江戸時代の主な文化財の分布図 ※図中の番号は指定等文化財リストと対応する

### (5) 明治時代以降

明治維新後、現在の下野市域は、<sup>はいはんちけん</sup>廃藩置県により当初は真岡県、後に日光県に属したが、明治6年(1873)に栃木県に編入された。真岡県の時期に真岡県知事事務所が<sup>かいうんじ</sup>開雲寺敷地内に置かれた。明治22年(1889)の町村制施行後には、村々の合併により吉田村、薬師寺村(南河内地区)、姿村、石橋町(石橋地区)、国分寺村(国分寺地区)が成立し、これが第二次世界大戦後にさらに合併して南河内町、石橋町、国分寺町となり、平成18年(2006)の合併で下野市となった。

明治時代、現在の自治医科大学がある場所は、<sup>かんゆう</sup>官有の<sup>へいちりん</sup>平地林が広がり周辺住民の<sup>さいそうち</sup>採草場として使用されていたが、明治44年(1911)に<sup>とちぎたねうまじよ</sup>栃木種馬所が設置され軍馬生産の一翼を担った。その後、第一次世界大戦の影響を受けて大正13年(1924)に廃止、2年後に畜産技術や農業者の指導機関として<sup>とちぎけんたねうまじよ</sup>栃木県種馬場が設立された。昭和38年(1963)に<sup>とちぎけんしゆくじよ</sup>栃木県種畜場へと改組されたが、<sup>こうどけいざいせいちようき</sup>高度経済成長期の<sup>へきちりようせいさく</sup>僻地医療政策による昭和47年(1972)の自治医科大学の開学と周辺地域の都市開発に伴い、<sup>にしなすのちくさんしけんじよ</sup>西那須野畜産試験場に統合移転となった。自治医科大学周辺は大学の開学に伴い、昭和58年(1983)に自治医大駅が開業するとともに、同年から自治医科大学周辺開発事業が施行され、現在の市街地が形成され始めた。

旧石橋町では明治18年(1885)に東北本線が開通し、明治22年(1889)に当時の石橋町を中心に結成された下野干瓢商組合によって栃木県の主要な商品作物である干瓢の流通の中心地として商取引を行う<sup>といや</sup>問屋や<sup>なかがいしよ</sup>仲買商が多く集まった。これにより、石橋町は県内で生産される干瓢移出の中心地として名を広く知られるようになった。また、東北本線の開通は、江戸時代に整備された日光街道により石橋宿に設置された馬宿にも影響を与え、明治38年(1905)には正式に馬市場が開設した。その後、馬市場は昭和18年(1943)、第二次世界大戦の戦況の悪化により閉鎖するが、戦後家畜市場として再開した。家畜市場は、<sup>こううんき</sup>耕運機の発達により昭和30年代の半ばから馬に代わって牛が中心に取引されるようになり、平成元年(1989)3月6日のせり市を最後に閉場となった。

旧国分寺町は東北線の開通をうけて明治26年(1893)に小金井駅が開業し、<sup>はたごや</sup>旅籠屋を中心とした商業から倉庫業や貨物運送業へと変化し、物資輸送の拠点として発展した。



現在の自治医科大学周辺(大正14年頃)

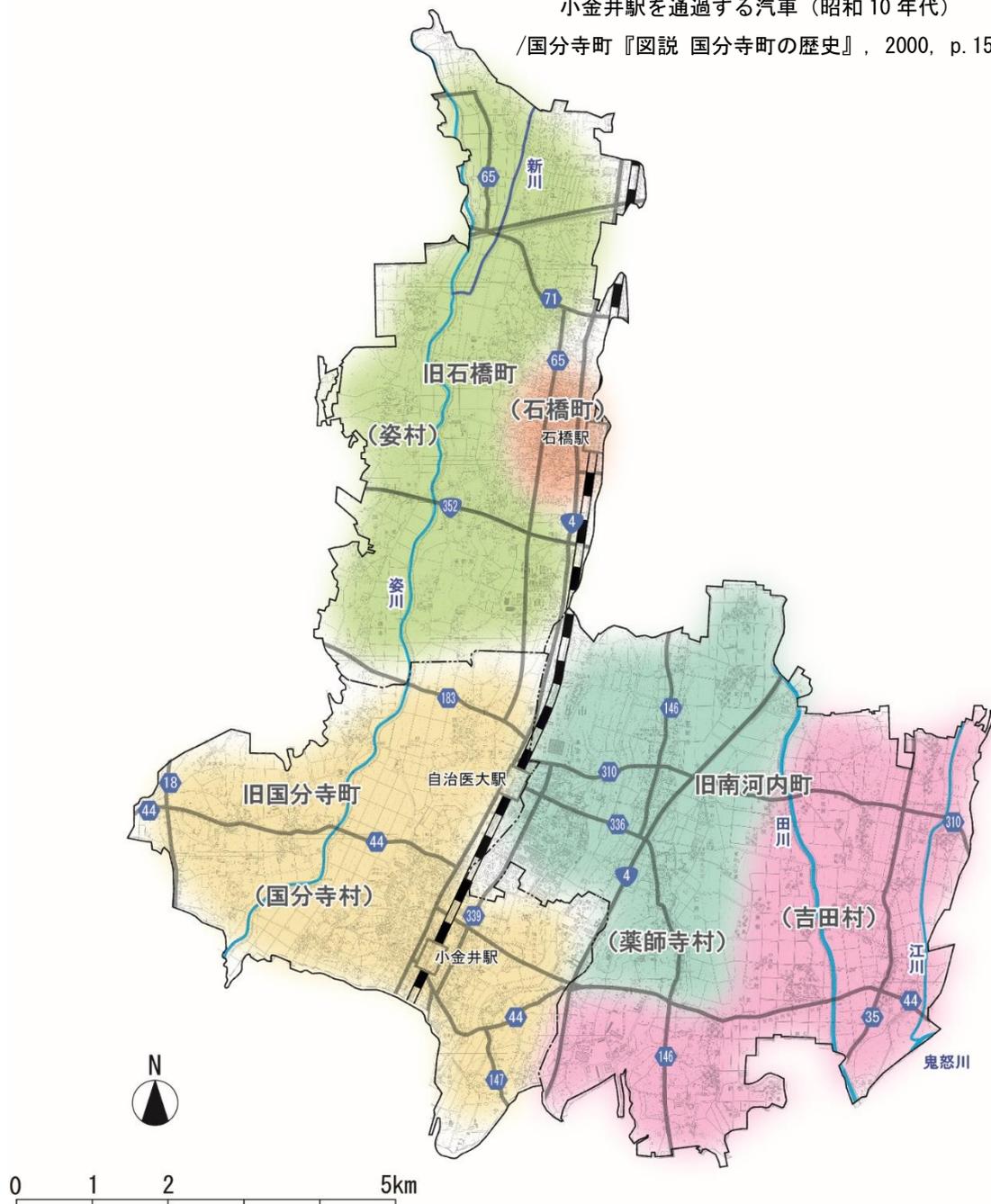


石橋家畜市場の様子(昭和30年代)

昭和 41 年（1966）には旅客の増加に対応するために小山電車区が小金井に建設されたことに伴って小金井駅始発、終着の電車が増発し、まちづくりの中心地として小金井駅舎の改築や小金井駅東口の開設等が行われ、駅周辺の市街化が急速に進み現在の街並みが形成された。



小金井駅を通過する汽車（昭和 10 年代）  
/国分寺町『図説 国分寺町の歴史』，2000，p. 159



旧 3 町の範囲図